

R. Browning の宗教詩：*An Epistle
Containing the Strange Medical Experience
of Karshish, the Arab Physician*
—— Kirshish の自己実現

野 口 忠 男

- I はじめに
- II 作品と聖書の背景 —— ラザロの復活
- III ラザロのイノセンス性
- IV カーシシュの自己実現
 - 1 カーシシュの医学的観察
 - 2 カーシシュの医学的解釈への疑念
 - 3 キリストによる神の顕示
- V おわりに

I はじめに

Arthur Symons によるとクレオンは西洋の懐疑的な人物であり、カーシシュは東洋の信仰心のある人物である。前者は信仰に関して提示された新しい事象を好まないが、後者はそれを吸収しようとする人物である。⁽¹⁾ DeVane は、この詩には来世を体験したラザロが、懐疑に陥らないで神の愛を生きる姿が示されていると解釈している。⁽²⁾ Roma A. King, Jr. は次の様にとらえる。

The poem, in short, is the realization in poetic structure of Karshish's attempts to order the chaotic elements of his inner life, and to accept the revolutionary implications of his coming to know and to embrace "the all," the total new vision of meaning which his encounter with Lazarus engenders.

この詩は、要するにカーシシュの内面生活の混沌とした要素を秩序だて、「全一なるもの」つまりラザロとの出会いにより生ずる意味の全体的な新しいヴィジョンを知覚し信じるようになる画期的な意味あいを、受け入れようとするカーシシュを詩構造に実現したものである⁽⁵⁾。

私たちはこの詩を単にラザロの視点あるいはカーシシュの視点から眺めるのではなく、劇的に立体的にラザロのイエスによる復活体験の意味とカーシシュのラザロとの出会いによる自己発見を関連させ心理分析と実存的立場から考察することが重要であると思える。特にカーシシュと永遠の神のヴィジョンを直視したラザロとの対話、カーシシュの自己との対話を考える時、Browning の劇的独白による詩を解釈し、根底に流れる実在的な宗教意識を知ることが出来るように思われる。Roma A. King, Jr. が指摘する「全体的な新しいヴィジョン」を読み解くことなのである。

II 作品と聖書の背景——ラザロの復活

DeVane は、この作品の成立年代について次の様に推測している。Kirshish は、おそらく 1853 年の遅い時期、あるいは 1854 年の早い時期にローマで書き始められ、その年の夏にフロレンスで完成したものであろう。Browning は、カーシシュが師エイビブへ手紙を書き送ったと思われる年、66 年にパレスチナを侵略したヴェスパイジャン皇帝の遺業に、主題の暗示を得たのかも知れない。なおも Browning 夫妻が、1853 年 11 月にローマを訪れたとき、彼らの友達ストーク家の息子の死に出くわした。このことが、詩人の医学的な面への関心呼び起こしたのかも知れない⁽⁴⁾。

この詩に於ける主題の出所は、『ヨハネによる福音書』11 章 1-44 節である⁽⁵⁾。Browning は、この福音書をことのほか好み、*A Death in the Desert* に於いては、高等批評による宗教教義への攻撃からこの福音書を守ったのである⁽⁶⁾。

ラザロ復活の物語の要点を考えてみたい。イエスはユダヤの伝道の後半に、エルサレムの宗教当事者たちの強い圧力を回避するために、活動

の舞台をヨルダン川の東に移した。この時ベタニアからラザロの病気が重いという知らせが届いた。イエスはラザロの病気が死ぬほどのものではない。それは神の栄光のためであり、神の子がそれによって栄光を受けると言われた。イエスがベタニアに到着した時、ラザロは死んですでに4日間も墓の中に置かれていた。大ぜいの人がマルタとマリアを慰めようとしてやって来ていた。二人は喜んでイエスを迎えたけれども、ラザロの死んだ今はどうすることも出来ないと考えていた。イエスは激しく感動し、墓に入って行った。洞穴の中の墓から人々が石を取り除けると、イエスは目を天にむけて祈り、大声でラザロよ出て来なさいと呼ばれた。すると死人は、手足を布でまかれ、顔もおおいで包まれたまま出て来た。イエスはラザロを蘇らせたのである。これを見て多くのユダヤ人がイエスを信じるようになった。エルサレムの宗教当業者たちは、この出来事に驚き議會を召集しイエスを殺そうと相談した。

これがラザロの復活の話である。ここにはイエスによる神の愛の顕示を信じる者と疑う者が描写されている。イエスの弟子、ラザロと二人の姉マルタとマリア、多くのユダヤ人はイエスによる神の愛を信じ、一部のユダヤ人たちは、パリサイ人たちと祭司長たちは疑念を抱く者である。この信仰と懐疑、愛と不信、光と闇の問題は、Browning の宗教詩の二極をなす主要なテーマである。彼はこの問題を幾多の宗教詩に於いて考えている。神の愛への強い信念は、*Christmas-Eve and Easter-Day*, *Saul*, *A Death in the Desert*, 合理主義者の弁明は、*Bishop Blougram's Apology*, 懐疑の思想を語る詩は *Cleon* に於いて示されている。これらの作品には信仰と懐疑の究極の相が描き出されている。*Kirshish* は、懐疑から信仰へ移行する作品と位置づけることが出来るのである。ラザロの復活の奇跡物語は、Browning がこの問題を考える上で絶好の題材であったと言える。

III ラザロのイノセンス性

Browning は、1845年1月13日付けの Elizabeth Barrett への手紙で、人間が直視するなら目がくらんでしまう純粋な白光について語っている。

You speak out, *you*, —I only make men & women speak—give you truth broken into prismatic hues, and fear the pure white light, even if it is in me: but I am going to try.⁽⁷⁾

あなたは、はっきり語る、あなたは——私はただ男と女に語らせるだけです——私はあなたに七色に分散した真実を描いて見せます。私には純粋な白光がこわいのです。たとえそれが私の心の中にあっても。それでも、私はやってみるつもりです。

ラザロは、この「純粋な白光」に似た神の強烈な光を受け死の状態からあまりにも急激に蘇生させられたため、完全に精神の均衡を失っている。

Heaven opened to a soul while yet on earth,
Earth forced on a soul's use while seeing Heaven.
The man is witless of the size, the sum,
The value in proportion of all things,
Or whether it be little or be much. (11.141-5)

天はまだ地上にある魂に神意を打ち明け、
地は天を仰いでいる間魂の働きを促した。
男は物の大きさ、量、
すべてのものの釣り合う価値、
その大小の判断がつかない。

全知、全能、遍在の神のあらわな信仰は、意識ある人の感覚にとってはあまりに強烈すぎて堪えられないものである。神の永遠の栄光も人間が直視するなら、ラザロのように精神の均衡を失ってしまうことになる。Browningは *Bishop Blougram's Apology* に於いてこのことを簡潔に表現している。

Pure faith indeed—you know not what you ask!

Naked belief in God the Omnipotent,
Omniscient Omnipresent, sears too much
The sense of conscious creatures to be borne.
It were the seeing him, no flesh shall dare.⁽⁶⁸⁾

実際純粋な信仰は — あなたは求めるものがわかっていない！
全能、全知、遍在する神をありのまま信ずることは
意識ある人間の感覚には
強烈すぎて堪えられない。
これは神を直視すること、肉身の人間がとうてい出来ることではない。

ラザロは、"a child" (l.117) "a sheep" (l.119) の言葉からも理解されるように、ピパやダビデ⁽⁶⁹⁾同様神の白光を生きる純粋無垢な人物である。W. Blake は幼な子にイノセンス性を見出し、W. Wordsworth は自然や社会から虐げられた者にイノセンス性を見出したように、Browning も純粋な魂の持ち主を生み出している。人は無垢な魂に触れる体験を通して、自己の存在を直視し、魂の発展を求めるようになる。つまり人は純粋な魂を鏡としてそれに自己を投影し、真実の自己の姿を探すとも言える。この詩に於いてラザロの無垢な人間像は、カーシシュが真実の自己の姿を見出す上で重要な役割を果たしている。カーシシュは、ラザロの神秘的言動に参入し深く思い巡らすことによって、逆に自己の意識されない隠された心の領域を除々に認識するようになる。この心理的で実存的な自己認識・自己発見に Browning の詩の原理が働いていると言える。つまり自意識の強い人間が純粋無垢な人間を介しながら、客観的認識と主観的認識を織りなしていく複雑な精神の軌跡が彼の詩となるのである。

IV カーシシュの自己実現

この詩は書簡形式を用いたもので、アラビアの医者カーシシュが、彼の師エイビブにあてて書いたものである。二人とも架空の人物である。カーシシュは書簡の冒頭で自分について重要な言葉を述べている。

Karshish, the picker-up of learning's crumbs,
The not-incurious in God's handiwork (II.1-2)

カーシシュ、学問の屑を拾い集める者、
神の業に関心を抱く者

ここにはカーシシュの二つの顔が描かれている。医学に熱中しているカーシシュと神の業に関心を示すカーシシュ。一つの顔は医学の象徴であるエイビブ先生へ向けられ、他の一つの顔はラザロの不思議な体験に向けられている。カーシシュはいわば医学と宗教の狭間に立ち、医者として科学的に客観的に実証的にラザロを検証していく。彼は医学界の最高権威エイビブ先生へ、敬意を表しながら、旅の途中で見聞した医学上の経験をくまなく報告する。今回の報告は 22 回目のものである。これが序詩として考えられる書簡の書き出しの部分である。

カーシシュは、ジェリコの町からエルサレムへ向う旅の途中である。彼は残酷な旅の間、身もやせ細る思いであった。この地方は、ローマ皇帝ヴェスペイジャンあるいはその皇子が、進軍して来るという噂が広まっていた。彼はある時血に飢えた一匹の黒い山猫が、耳を立て黄色の目をぎらつかせかみつこうとしたので、杖を投げつけて退散させた。二度も盗賊が現れはぎ取られ打ちのめされた。ある時は町の者からスパイ呼ばわりされたこともある。彼はエルサレムにほど近いベタニアの寒村へやって来てここで一夜を過ごすのである。彼は隔日に発作を起こす熱病や癲癇に関する適切な治療を学び知った事や癲癇によく似た禿頭病の治療で苦勞したことなどを細かく師に報告する。

1 カーシシュの医学的観察

カーシシュは科学者として彼が体験した事実を報告してきた。しかし彼はある患者の病気のことが気にかかっている。医者として師へ報告するにはあまり不思議な事例であるだけに恥ずかしい思いにかられるのである。彼はその患者が立ち去るとすぐ様態を詳細に報告するために手紙を書くのである。カーシシュは、この男をあくまでも病氣 "ailment" (1.77) の患者 "his case" (1.70) と見ている。

カーシシュはこの男の病気を錯乱症の一例と診断する。つまり 3 日間理由もなく続いた失神状態のあげくに癲癇を併発してしまった。その時に薬か呪いか厄払いかあるいはまだ判明していない独特な術か何かの効験で病気はたちまち去り、今は全く身心とも健康になっている。しかし男の病気があまりにも急激に回復したために、彼は精神の均衡を失っている。その男は、一度死に（実際彼は埋葬されたのである）その後彼の属している部族のナザレの医者 “a Nazarene physician” (l.100) の手で蘇生させられたと確信している。その医者が「起きよ」と命じたので起きたと語っている。これは決してありふれた出来事ではなく、回復後もこの妄想 “a fume” (l.103) は、彼の生命の心髄 “the life of life” (l.105) に巣喰っている。

2 カーシシュの医学的解釈への疑念

カーシシュはその男が病後を暮らす様子を伝える。この男の名はラザロというユダヤ人であり、多血質 “Sanguine” (l.109) で骨格のつり合いがよくとれ、年齢は 50 歳、健康状態は良好で見本のような人物である。カーシシュは、ラザロの復活に関して医学を超えたものを感じ、医学への疑問を抱き始める。

Think, could we penetrate by any drug
And bathe the wearied soul and worried flesh,
And bring it clear and fair, by three days sleep! (ll.113-5)

考えて下さい、どんな薬をしみ込ませ、
疲れた魂と痛む体を潤し、
三日の眠りで回復させられるでしょうか！

ラザロは子供のように世間を眺めている。彼の種族の長老たちが、カーシシュのところへ羊の様な柔順なラザロを連れて来た。ラザロはカーシシュの質問に耳をかし答えてくれた。長老たちが語っている間は、彼は飛んでいる蠅の方を見つめていた。けれどもラザロは決して白痴 “fool” (l.124) ではない。彼は必要もないのに用心深くしたり、そうか

と思うと酔っぱらいみたいに我を忘れて陽気になる。この男には中庸にふさわしい思慮分別はまったく欠けている。空想的な意思こそがこの男の法則なのである。

カーシシュは、肉体の働きをはるかに超えた空想的な意思の働きについて思いをはせる。ラザロの頭は、貧弱な頭脳では消化しきれない知識“knowledge” (l.139) を授けられた。天は彼が地上にある間に彼の魂に神意をつたえ、彼が天を仰いでいる間に、地は彼の魂の働きをむりに強いるのである。そのために彼の心は、物の大小、軽重、釣り合いの価値などの判断がつかなくなっている。例えばローマ軍がエルサレムを攻略すると告げても、驟馬が瓢箪をのせて通って行くと言っても、彼にとっては同じことである。それに反して何かつまらないことを話してやると目を丸くして驚くのである。ラザロの子供が病気で死にかけていると告げても、彼は平生の仕事に精出していられる。一方子供が遊んでいる時でも稽古中でも睡眠中でも、何か心に気にかかることを言ったり態度を取ったりしたり目つきをしたりしたなら、彼は恐れったり怒ったりいきり立ったりする。

ラザロは、生の玉の緒“some thread of life” (l.178)、つまり精神的生活をしっかりとつかんでいる。その緒の両端は、気も狂いそうな栄光の天界“some yast distracting orb” (l.180) につながっている。彼はその栄光の世界を意識しているが、まだそこに入ってはならない。彼は天上の精神生活“the spiritual life” (l.183) と地上の生活“the earthly life” (l.183) との中間に存在している。彼には天上の精神生活の法則“law” (l.184) がこの世の法則であると映っている。

つまり

- His heart and brain move there, his feet stay here. (l.185)

彼の心と頭は精神界に向かい、足はこの世にある。

ラザロは、天上の精神界の法則と地上の法則の矛盾に悩まされ、天上の法則は地上では妨げられ実現困難なことを嘆くのである。

ラザロは、キリストの愛と力とに我を忘れ生きている。彼はキリスト

を知っていることを誇りと思い、謙虚になり、神の秘密も知っているために自分の誤りをはっきりと自覚する。彼は天意の何たるかを知り、また天意がいかにあるかを知り、心へりくだってそれに従うだけである。今は霊界と肉が分離しているが、死ぬ時には霊肉調和の状態にたち帰ることを願っている。彼は神のよみし給うかぎり生きながらえようとする。ラザロは神の愛と力を強く信頼し、神の意のままに生きている信仰の証し人である。だから彼は狂信者が改宗者を作るように、自分の宗派の教義を他人に押しつけたりはしない。人が彼の偉大な真理を嘘と呼ぼうとも、みむねのままに生きることが彼の確信となっている。

3 キリストによる神の顕示

カーシシュは、医者としての当然の務めからラザロの病状を探ってきた。彼はローマ軍が進撃して来て、お前の町、民族、お前の狂気じみた話、お前自身をも、ちっぽけな火花のように踏みにじろうとする時、なぜそ知らぬ顔で平然としていられるのかと尋ねた。するとラザロは、ただ目を大きく見はって、カーシシュを見つめるだけである。彼には天意がわかり、神の意のままに生きることをよしとしているのである。でもラザロは決して無感覚“*apathetic*” (l.226)ではない。彼は人間だけでなく、鳥獣や野辺の草花にまで愛する優しい心を持っている。彼の感性は優しく鋭く万象に対して開かれている。彼は子羊のようにおとなしいが、無知と無関心と罪を見ては我慢することが出来ず、激しく怒る男である。それも長くは続かずすぐに消える怒りなのである。これは優しい愛に対して罪を許さない厳しい愛と呼ぶことが出来るものである。

エイビブ先生は、カーシシュがナザレの聖者“*the sage himself, the Nazarene*” (l.244)を探し出し、ラザロの病源と治療法について教えてもらわなかったことをとがめるかも知れない。ところがこの学識深い医師“*the learned leech*” (l.247)は、何年も前に騒乱が起こった時に、奇怪な神の国の掟と信条を打ち立てたために、妖術と謀叛の罪に問われ殺害された。聖者の殺害は、彼が地震を防ぐ奇蹟を行うことが出来なかったために、怒り狂った民衆の罾にかかりなされたものである。カーシシュは医者として、患者ラザロを頑固な気遣い“*our patient Lazarus/Is stark mad*” (ll.263-4)と考える。治療を受けた男は、施療者を神にほか

ならぬ方とあがめている。

This man so cured regards the curer, then,
As — God forgive me! who but God himself,
Creator and sustainer of the world,
That came and dwelt in flesh on it awhile! (ll.267-70)

いやされたこの人は、いやした方を
—— 神よ許して下さい！ 神自身と考えている、
世界の創造主であり支え主、
しばらくこの世に来て人として住んでいた！

聖者はこの世で生活し、人々に教えをたれ、病人をいやし、自分の家でパンを割いて人々に与えた。ラザロは、臨終のさい聖者のそばにいて、聖者が私は神であると言う言葉を聞いたということである。カーシシュは、貴重な資料が次から次へと注意をひくのであるから、この種のつまらない事をくどくど書く必要があるだろうかと自責の念にかられる。そこで話題を変え、池の端には硝石を含む青い花をつけたアレッポ種の興奪葉草りちさが、生い茂っていることを伝える。しかしカーシシュは「これは不思議なことです！」“It is strange!” (l.282) と述べないではいられない。彼は、ラザロの病をいやした聖者イエスの不思議な力に心奪われ、医者立場を超えてイエスに於ける神の偉大さに思いをはせているのである。

私達は最後にカーシシュの追伸を読まなければならない。彼はついに本音をはいてしまうからである。彼は手紙があまりにも長々となりすぎたことをわびている。ラザロが彼の心に強く触れ、呼びさました特別な興味と畏怖の念は、十分に報告することは出来ないと言語。彼は多分旅の疲れのためであると、旅のせいにし、自己弁護するように、ラザロに出会った事情を書き加える。彼がぎざぎざに尖った丘陵の背を横切って行くと、気味悪い月が出て来て、風が背後から吹いて来た。これは“Childe Roland to the Dark Tower Came” 中のローランドの苦悩の旅を思わせるものである。ローランドが最後に闇黒の塔を見るように、カーシ

シュは陰気なベタニアの町でラザロに出会ったのである。この報告書は、信用出来ないシリア人に託したので運よく届けば好都合であり、かりに消失してもいたしかたないと考える。彼はエルサレムに到着したら、この埋合わせになる報告をする旨を伝え、師にわびながら最後の言葉を吐く。

The very God! think, Abib; dost thou think?
So, the All-Great, were the All-Loving too —
So, through the thunder comes a human voice
Saying, “O heart I made, a heart beats here!
Face, my hands fashioned, see it in myself.
Thou hast no power nor may'st conceive of mine,
But love I gave thee, with Myself to love,
And thou must love me who have died for thee!”
The madman saith He said so: it is strange. (ll.304-12)

誠にあの神のことを！エイビブ先生お考え下さい。お考えですか？
このように、全知全能の神はまたすべてを愛する神なのでしょう ——
このように、雷鳴を貫き人の語る声が聞こえてきます
「私が創造した心臓、同じ心臓が私のこの胸の内で鼓動している！
私の手で造った顔、同じ顔を私の内にみなさい。
おまえは力なく また私の力を知らない、
しかし私は愛をおまえに与え、愛のしるしとして私自身をも与えた。
おまえのために死んだ私を愛さなければならない！」
狂人は神がこう言われたと言うのです。
これは不思議なことです。

“The very God!” この言葉には、カーシシュが神に対して抱いているあらゆる感情——驚嘆、畏怖、憧憬、疑念——が含まれている。彼はエイビブ先生に医学を超えた神の存在について考えてほしいと語る。彼がラザロから聞いた神は、恐ろしい力を持つ全知全能の存在でありまたすべてを愛する存在である。神の声は雷鳴に交じって人の声となって聞こえて

来る。創造の神は、生命の源である心臓を自分の心臓に似せて作り、手で神と同じ顔を作った。人間には心臓や顔を作る力はない、また神の創造の偉大な力は知らない。しかし神は人間に愛を与え、愛のしるしとして自分自身をも与えた。おまえたちのために贖罪者となって死んだ救主キリストを愛さなければならない。

私たちは本詩に於いて2度使用されている“*It is strange*” (1.282 と 1.312) の意味を問わなければならない。これを問う前にカーシシュの人間像を要約してみたい。彼の医者としての態度は、医学的、科学的、宗教的、実存的、分析的、心理的であり、純粋性と勤勉性が認められる。彼には未知のものに対して積極的に探求しようとする意志が強く働いている。彼は将来へ向かって自己を投げかける者であり、現にある自己から外に脱出して行く存在であると言える。宗教的で実存在的な彼であってみれば、ラザロの体験に対して、“*It is strange*” と強い関心を抱かないではいられない。この言葉の意味は、(1)カーシシュにとってラザロの病気が医学的に説明出来ないために不思議に思ったこと (2)意識的にそう感じる自分自身が不思議であるということ (3)カーシシュの無意識の奥底に動いている「全一なるもの」を知りたいと思う気持が不思議に感じられることが考えられる。Philip Drew はカーシシュは、知的慎重さ“*intellectual caution*” や医学的心理的観察“*medical and psychological observation*”のためにキリスト教を受け入れることを拒んでいると解釈している⁽¹²⁾。しかし私たちは、M. Buber の次の言葉を聞く時

なんじについての直観は、永遠のなんじを見出すまでは、われわれの心に満足をあてえない。というのは、われわれの心には最初からなんじの姿が存在しているからである。⁽¹³⁾

あるいは V. E. Frankl の言葉、

……実存分析は、次の第三の発展段階において、人間の有する無意識の精神性の内部に無意識の宗教性のごときものを発見した。この宗教性とは——多くの場合なお潜在的なものにとどまっているとはいえ——人間に内在的に固有なものとおもわれる超越者への関係としての、

神との無意識の連繋という意味のものである。したがって、無意識の精神性の発見によってエス（無意識）の背後に自我（精神）が見出されるのであるが、今や無意識の宗教性の発見によって内在的のさらに背後に超越的汝が見出されたわけである。つまり自我が「無意識でもあるもの」であることがわかり、無意識が「精神的でもあるもの」であることがわかった上に、さらに今度はこの精神的無意識が「超越的でもあるもの」として開示されたわけである⁽¹⁴⁾。

を読む時、カーシシュのラザロへの深い関心と洞察には、隠された神、意識されない神への志向が示されているように思える。W.L. Phelps が「彼（ラザロ）は神の王国からかけ離れてはいない」⁽¹⁵⁾ “he is not far from the kingdom of god” と述べるのは納得出来る考えである。また John Woolford & Daniel Karlin もカーシシュに於けるラザロの体験の真実性を認めている⁽¹⁶⁾。カーシシュは、ラザロの医学を超えた神秘性を通して意識的分析から無意識の世界へ参入し、宗教的医者としての方向に立ち向かう可能性が高いのである。

V おわりに

私たちはこの詩をカーシシュのラザロとの出会いによる自己発見として心理的に実存的に読んできた。彼はラザロの復活を医学的観点から分析しながらも、結局彼の病状を医学の知識では解明することが出来なかった。彼はラザロのイエスと神に関する言葉に触れ、医学を超えるものの存在に次第に関心を抱いていく。ここには M. Buber が述べる「われわれの心には最初からなんじの姿が存在している」と関係しているし、V.E. Frankl の「意識されざる神（無意識の神）」が暗示されている。カーシシュは、医学・科学や意識を代表するエイビブ先生とラザロのイエスを通じた神体験の狭間で微妙に揺れながら「存在の光」の方向へ向かっていく。カーシシュが医者として神の力と愛の世界へ自己を投げ真に開眼する時は近いと読むべきであろう。彼の精神の描く軌跡の延長線上にダビデやヨハネやキリストが存在している。詩人 Browning の宗教的実存的自己探求の道程は、永遠の戦いとして理解されなければならないの

である。

【注】

- (1) Arthur Symons: *An Introduction to the Study of Browning*, Cassell & Company, Limited, 1886, p.96.
- (2) W.C. DeVane: *A Browning Handbook*, New York, 1995, p.224.
- (3) Roma A. King, Jr., *Karshish Encounters Himself: An Interpretation of Browning's "Epistle"*, Spring 1968, Vol.1, PT.1, p.24.
- (4) W.C. DeVane: *A Browning Handbook*, p.224.
- (5) *Ibid.*, p.224.
- (6) 「北星論集」(29号)(1992年), 拙文「R. Browningの宗教詩:A *Death in the Desert*に於ける信仰と懐疑」pp.230-1 参照。
- (7) *The Letters of Robert Browning and Elizabeth Barrett Barrett*, Vol.1, Harper & Brothers, Publishers, New York and London, 1898, p.6.
- (8) R. Browning, *Bishop Blougram's Apology*, ll.647-51.
- (9) 「北星論集」(21号)(1983年), 拙文「R. Browning: *Pippa Passes*に於ける innocence」参照。
- (10) 「北星論集」(25号)(1987年), 拙文「R. Browningの宗教詩:Saulに於ける闇と光」参照。
- (11) 「北星論集」(33号)(1966年), 拙文「R. Browning: "Childe Roland to the Dark Tower Came"—「暗黒の塔」の象徴性」参照。
- (12) Philip Drew: *The Poetry of Browning A Critical Introduction*, Methuen, 1970, p.31.
- (13) マルティン・ブーバー『孤独と愛——我と汝の問題——』野口啓祐訳, 創文社刊, 1974年, p.118.
- (14) ヴィクトール E. フランクル『識られざる神』佐野利勝 木村敏訳, みすず書房, 1973年, p.80.
- (15) W.L. Phelps: *Robert Browning*, Archon Books, 1968, p.219.
- (16) J. Woolford & D. Karlin: *Robert Browning*, London & New York, 1996, p.225.